復刻版 日光 全10巻・別冊1

●体　裁：A5判・上製・総4、688頁
●別　冊：解説・総目次・索引
別冊のみ分売可＝本体1、000円＋税
ISBN978-4-8350-8011-6
●解　説：田中　綾（北海学園大学教授）
●推　薦：佐佐木幸綱（歌人・早稲田大学名誉教授）
北原東代（文学研究者）
山田　航（歌人）
●揃定価：本体180、000円＋税

●配本概要

配本	復刻版巻数	収録号	価格・ISBN
第1回配本	第1巻	創刊号（第1巻第1号）～第1巻第3号（1924年4月～6月）	2016年10月刊行 本体54、000円＋税 ISBN978-4-8350-7997-4
	第2巻	第1巻第4号～第1巻第6号（1924年7月～9月）	
	第3巻	第1巻第7号～第1巻第9号（1924年10月～12月）	
	別冊	解説・総目次・索引	
第2回配本	第4巻	第2巻第1号～第2巻第3号（1925年1月～4月）	2017年2月刊行 本体54、000円＋税 ISBN978-4-8350-8002-4
	第5巻	第2巻第4号～第2巻第7号（1925年5月～8月）	
	第6巻	第2巻第8号～第3巻第1号（1925年9月～1926年1月）	
第3回配本	第7巻	第3巻第2号～第3巻第5号（1926年2月～5月）	2017年6月刊行 本体72、000円＋税 ISBN978-4-8350-8006-2
	第8巻	第3巻第6号～第3巻第9号（1926年6月～9月）	
	第9巻	第3巻第10号～第4巻第1号（1926年10月～1927年1月）	
	第10巻	第4巻第2号～第5巻第2号（1927年2月～12月）	

◉関連図書のご案内

荻原井泉水　主宰（明治44年～昭和19年刊）
層雲　全97巻
A5判・上製・総38、722頁
揃定価1、652、000円＋税
'96年6月～'02年9月配本完結（復刻版）
第Ⅰ期（明治・大正期）全47巻（揃定価752、000円＋税）
第Ⅱ期（昭和戦前期）全50巻（揃定価900、000円＋税）

本誌は、形式をきらい、内在的・主観的立場から句を生み出すために、季語無用・定型破壊を掲げた自由律俳句の舞台となった俳句雑誌である。自由律俳句の牙城として野村朱鱗洞・芹田鳳車・尾崎放哉・種田山頭火・栗林一石路などの俳句作家を輩出した。
●推薦＝金子兜太・佐佐木幸綱・坪内稔典・夏石番矢・山下一海

現代日本詩集　1927年～1944年　全5巻・別冊1
別冊＝解説（澤　正宏）・執筆者索引
A4判・上製・総1、770頁
揃定価125、000円＋税
'09年12月～'10年5月配本完結（編集復刻版）

昭和戦前・戦中期にかけてほぼ毎年刊行されていた、その年に活躍した詩人とその作品を紹介する「年鑑詩集」二二点、総一、一〇〇名にもおよぶ詩人のデータおよび三、八〇〇の作品を収録。
●推薦＝阿毛久芳・佐々木幹郎

日本女性詩集　1930年～1943年　全2巻・付録1・別冊1
別冊＝解説（澤　正宏）・総目次・索引
A4判・A5判・上製・総1、162頁
揃定価70、000円＋税
'14年7月刊（編集復刻版）

昭和戦前・戦中期に女性の作品のみを集めた詩集、及び関連する雑誌群を収録。戦時色が強くなるにつれて女性の戦争協力体制も強化され、女性詩は「母性の文学」として隆盛をみせるようになる。近現代文学史・女性史研究のための貴重資料である。
●推薦＝宮崎真素美

表示価格は、全て税別

不二出版
〒一一三－〇〇二三
東京都文京区向丘一－一一－一二
TEL　〇三－三八一一－四四三三
FAX　〇三－三八一二－四四六四
振替　〇〇一六〇－二－九四〇八四

復刻版 日光 1924年～1927年

全10巻・別冊1
体　裁――A5判・上製・総4、688頁
別　冊――解説（田中　綾）・総目次・索引
推　薦――佐佐木幸綱・北原東代・山田　航
揃定価――本体180、000円＋税
全3回配本（2016年10月・2017年2月・6月）

雑誌『日光』は一九二四（大正一三）年四月に創刊された雑誌である。北原白秋、前田夕暮、古泉千樫、土岐善麿、川田順、釈迢空（折口信夫）、石原純らが編集同人として参加した。

当時の最有力誌『アララギ』の歌風に飽き足らない人々が発表の場を求めて集まり、自由で清新な誌上の雰囲気の中で互いに切磋琢磨し後世に名作を残していくことになる。

近代短歌をはじめ近代文学研究の重要資料である。

大正歌壇の停滞を危惧した北原白秋らが関東大震災後に刊行し、口語短歌運動の流れを勢いづけた短歌雑誌を復刻。

不二出版

推薦文

近代短歌史に新しい光が

佐佐木幸綱（歌人・早稲田大学名誉教授）

「日光」は、関東大震災直後の独特な流動的な空気のなかで誕生した超結社的な短歌雑誌だった。何かが動くのではないか、何かを動かせるのではないか。そんな漠然とした期待を背景に誕生した雑誌だった。何かが生まれるかもしれない。何かを生みだせるかもしれない。参加した歌人たちはそんな思いを抱いていた。

北原白秋をはじめとする「日光」の中心メンバーは、みな一八八〇年代生まれだった。創刊号発行の時点で、三十代後半から四十代前半の年齢だった。この年代の歌人たちは少年時代に「新声」「文庫」といった投稿雑誌から作歌をはじめた者が多かった。だから雑誌というメディアに期待するところが大きかったのだと思う。彼らはすでに、多くの雑誌を創刊し、つぶしていた。そして「日光」。

「日光」によって、具体的に何が動き、何が生まれたのだったか。そのあたりはまだ近代短歌史のなかで不分明なままにされている。隆盛する「アララギ」への対抗勢力がほしい。固定化した歌壇に風穴を開けたい。この二つのモチーフだけが、どの短歌史にも記されているばかりである。

このたび「日光」が復刻されることになった。事前に読ませてもらった田中綾さんの懇切な「解説」によれば、昭和期の女性歌人の活躍、そして口語短歌運動の展開にも、「日光」は大きな役割を果たしていたらしい。近代短歌史に新しい光が当たる予感がする。

壮年歌人の稀有なる大同団結が開花

北原東代（文学研究者）

大正一三年四月、雑誌「日光」は大正デモクラシーの自由思潮に、関東大震災で大衝撃を受けた壮年歌人たちの「新生」への意欲が結合して誕生した。既刊の『文学史』では「日光」創刊の動機をしばしば「「アララギ」に対抗するため」と記しているが、錯誤である。

「日光」の礎を築いた中心同人の北原白秋、古泉千樫らに、そのような低次元の料簡は無かった。そもそも千樫は「アララギ」出身であり、彼らの指標は、芸術良心に満ち、党臭無く、同人制の明朗なる大雑誌での前進、と白秋も「「日光」の思ひ出」に明記している。

千樫と同じく「アララギ」出身で「日光」に加わった釈迢空の「葛の花　踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり」、千樫の「秋の空ふかみゆくらし瓶にさす草稗の穂のさびたる見れば」、白秋の「薄氷嶺の南おもてとなりにけりくだりつつおもふ春のふかきを」などはいずれも「日光」初出で、それぞれの代表作の一首でもある。

同誌には文語定型の短歌・俳句、評論、散文、口語自由律の短歌・俳句・詩などが掲載され、生き生きと伸びやかな気風が漲っている。

「日光」は同人三十余名で出発し、漸次、主要同人推挙の弟子達も加わって三倍近くに増え、結局は同人間の意志の疎通を欠くなどで、創刊より四年に満たずに終息した。だが、その間、同人たちは互いに刺激し合い競い合い、自らとは異質の要素も吸収して、数々の名著を遺している。なお、白秋は同人中、迢空こと国文学者・折口信夫を最も尊敬していた。

読者は、「日光」独特の自由で清新、闊達な香気に浴し、大きな収穫を得るに違いない。

推薦文

口語短歌研究の活性化のために

山田　航（歌人）

清家雪子の漫画『月に吠えらんねえ』1巻にこんなくだりがある。萩原朔太郎、北原白秋、若山牧水の三人が高浜虚子と河東碧梧桐のプロレスを観戦（実際の本人ではなく作品からの印象をキャラクター化したという設定）。牧水が白秋に向けて「なあなあ歌壇もやろうぜ！　アララギ対日光因縁の対決！　モッさん（引用者注・斎藤茂吉）対お前！　宿命のライバル！」。白秋が「そもそも僕はモッさんには何の遺恨もないよ。やるなら島木のレッドだろ。あいつが諸悪の根源なんだから」。大正歌壇の状況を戯画化したワンシーンだ。他にもチカシやアサオなど相当勉強している人でないと置いてきぼりの名前が出て来る。

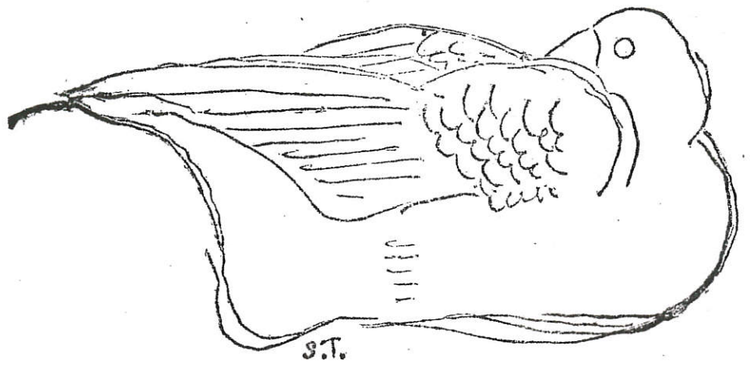
「日光」は反アララギの歌誌といわれるが、実質は「反島木赤彦」だった。教育者だった割に謎の商才を発揮してアララギをV字回復させた赤彦は興味深い人物だが、堅物過ぎて近代短歌に硬直化を招いたことは確かだ。白秋たちは彼と闘おうとした。大正歌壇というのはそれぞれのキャラがやたらと立っていてヒップホップでいうところのビーフ（論戦）を仕掛け合う、コンペティションな状況だったのだ。

見過ごせないのは口語短歌の実験場としての「日光」の役割。現代の口語短歌の源流はここで完成されているといっていい。「日光」の復刊とともに口語短歌の歴史的研究がさらに進展し、そして現代の口語短歌シーンがますます活性化してゆくことを願う。やっぱりね、口語が一番面白いんだから！

主要執筆者一覧

浅野梨郷　近藤武夫　初井しづ枝
生咲義郎　佐藤達夫　服部宗緩
石塚栄之助　椎名宗四郎　馬場静浪
石原　純　四海多実三　林　光雄
石渡成樹　釈迢空（折口信夫）　原阿佐緒
今村沙人　杉浦翠子　穂積　忠
大木篤夫　鈴木杏村　本間楽寛
大熊信行　鐸木　孝　前田夕暮
大高富久太郎　醍醐信次　三ヶ島葭子
大手拓次　橘　宗利　美木行雄
岡本かの子　棚沢慶治　村野次郎
金子不泣　津田青楓　元吉利義
川田　順　土岐善麿　矢代東村
川端千枝　友常幸一　安川三郎
北原白秋　中河幹子　安田稔郎
木下利玄　中河与一　由利貞三
久保田安治　中島哀浪　吉植庄亮
熊谷武雄　野地曠二　米田雄郎
桑山武之　萩原蘿月
古泉千樫　橋本徳寿

◀「巻頭言」（創刊号）



創刊號

日光を仰ぎ、
日光に親しみ、
日光に浴し、
日光のごとく遍ねく、
日光のごとく明るく、
日光のごとく健かに、
日光とともに新しく、
日光とともに我等在らむ。

短歌の新形式を論ず

石原　純

私は曩頃短歌の新形式について二三の意見を「週刊朝日」（三十一年四月十三日號）及び卯花垣が主催してゐたものではなく、私たちの國語の韻律に應じて自短歌が從來の音數の形式をもつたのは固より最初から確取捨せられた結果に過ぎません。尤もこの點に關し少の考證を要することで、一定の形式に歸着した理かには幾分の故意的な卽ち漢詩などからの影響がなとは限りません。けれどもいづれにしてもそれ以前記時代の歌謠が全く自由形式のものであつたことは。私たちが歌はうとする感情内容の變化に應じて に最も適當した韻律を選び音數形式を求めると云ふいかに考へても最も自然的な素朴的な路であるこを容れない處です。私たちは嘗て短歌の技巧的表現し、自然的な素朴的な萬葉の心に還らうと努力しま 名しこの精神が更に正しく徹底されるならば、私た の束縛的形式を排除して、却つて心の眞に要求す

▶「短歌の新形式を論ず」（創刊号）

日本文學の發生

折口信夫

日本文學が、出發點からして既に、今ある儘の本質と目的とを持つて居たと考へるのは、單純な空想である。其ばかりか、極微かな文學意識が含まれて居たと見る事さへ、眞實を離れた考へと言はねばならぬ。

古代生活の一樣式として、極めて緣遠い原因から出たものが、次第に目的を展開して、偶然、文學の規範に入つて來たに過ぎないのである。

似た事は、文章の形式の上にもある。散文が、權威ある表現の力を持つて來る時代は、遙かに遲れて居る。散文は、口の上の語としては、使ひ馴らされて居ても、對話以外に、文章として存在の理由がなかつた。記憶の方便と云ふ、大事な要件に不足があつた爲である。記錄に憑ることの出來ぬ古代の文章が、散文の形をとるのは、時間的持續を考へない、當座用の日常會話の場合だけである。繰り返しの必要のない文章に限られて居た。ところが、古代生活に見えた文章の、繰り返しに憑つて、のが多いのは、事實である。律は、此處にある。けれども其は、文發生の原動力、と言ふ事は出が、律文の發生を促したのであ

私は、其を「かみごと」（神語

今一つ、似た問題がある。抒就いてゞある。合理論者は、抒性の注意を惹く爲とする、極める。純生理的に又、原始的に考發生時に於いて既に、ある文學く考へるからの間違である。律

▶「日本文学の発生」（創刊号）

淺春舟行

深　靄

深靄に朝の間あかる日の居處たんぽぽのごと幼なかる見ゆ
黄にまろきをさな童の日の居處靄はふかしと舟ゆあふぎつ
朝花の黄のたんぽぽはいとけなし波搖り來ればざぶり濡れつつ
深靄の河心にあかるをさなごゑ愛し仔牛か舟に母戀ふ
下ん田か早や犁きたらし這ふ靄の沼波撲ち來る土の香青し
椦ぎ着きて火もほのほのと焚くならし沖田のガスの裾紅み見ゆ
つぶつぶと頭はうかぶ鳰の鳥靄ふかからし鴨のごと見ゆ

北原白秋

▲「淺春舟行」（創刊号）

・日・光・評・壇・

アララギ評

由利貞三

本質上、樂式として、循環的に、圓形の旋律運動をとるのは短歌本來の使命である短歌の其連環的彈性の脈動を截ち切り、其所に新たなる存在として、俳句の地位が確立された。

内容價値は暫く措いて、俳句は、躍動のない靜觀の詩であり、所屬からいへば當然散文に屬すべきものだと私は考へる。

詩な其性質上、客觀、主觀に分類して見るならば、俳句は明白に、客觀描寫の詩、る。

子規であつた。

子規は、永年押し通した其俳句の主張を更に、短歌の上に移して見せた。萬葉に目が開いても、子規の短歌は最後まで蕪村句である短歌に終始した。

子規の主張と、其作品を以つて金科玉條とし、其儘を享けつぎ、今日に到つてゐるものはアララギの歌風である。

說や主張はあつたが、結果から見て、アララギの歌風は、十七字の俳句を三十一文字に引き伸ばして見せる事であつた。

自然界の對象が、如何に、克明に、如何に微細にそれが、解剖され、分析されるか。宛も、精巧なる寫眞機と顯微鏡との役目を

▶「日光評壇」（第5巻第1号）